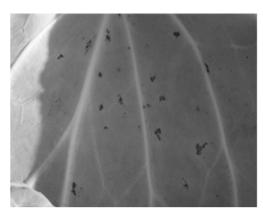
# キャベツ「初恋」におけるごま症の軽減 ~まずは、べと病の適期防除から~

#### 1 課題の目的

銚子市内で5月後半から6月にかけて収穫されるキャベツの結球頭頂部に直径数mm の濃褐色~黒色小斑点が多数発生し(以下「ごま症」)、問題となっている。そこで生産 者へのアンケート及び現地試験により、発生の状況と対策を明らかにした。

### 2 課題の背景

- (1) ごま症は収穫期になると急激に発生し、激しくなると販売できないこともある。
- (2) ごま症は「初恋」((株) トーホク)が平成18年頃に導入されて以降、主力品種となってから問題化し、平成29年度に販売組織の会合で原因究明と防除対策が要望された。
- (3)種苗会社などの資料には、ごま症と同一の症状をべと病と標記しているものもある。
- (4)「初恋」は早生性・斉一性に優れた有力品種であり、5月下旬から6月の安定出荷に欠かせない。
- (5) これまでに千葉県農林総合研究センター病理 昆虫研究室へ数回、ごま症の検体を持ち込み、 病原菌の確認に取り組んだが、いずれの病原菌 も検出されていない。



キャベツごま症

#### 3 普及活動の経過

(1) 発生状況に関するアンケート

銚子市農業振興会議の活動として、JAちばみどり営農センター銚子、銚子市農産課、千葉県農林総合研究センター水稲・畑地園芸研究所東総野菜研究室と連携し、銚子野菜連合会591戸を対象としたアンケートを実施し、116名から回答を得た。

アンケートではごま症の発生状況と併せ、べと病に対する薬剤防除の時期について 聞き取った。

(2) 殺菌剤による現地試験

前年まで、下位葉にべと病が発生し、結球部にごま症が多発生していた現地の3圃場を選定し、キャベツベと病に登録のあるメタラシキルMを含む殺菌剤の散布による防除試験を行った。

#### 4 普及(調査)活動で得られた成果

#### (1) べと病防除とごま症の発生状況

ごま症の発生状況を「毎年多発生」、「以前発生も現在解決」、「発生なし」、「その他」に分類したところ、結果は 28%が「毎年多発生」とした一方で、41%が「発生なし」であった。また、12%が「以前発生も現在解決」と回答した。

ごま症の発生が「毎年多発生」、「以前発生も現在解決」、「発生なし」の回答者を対象に、べと病防除の時期を聞いたところ、育苗中に防除していた回答者は「毎年多発生」では28%、「以前発生も現在解決」では86%であり、育苗中のべと病防除の有無による差が大きかった。また、殺菌剤にはメタラキシルMを有効成分とする農薬の防除効果が高いようであった。

#### (2) 殺菌剤の散布とべと病及びごま症の発生

3月中旬定植の圃場1、3月下旬定植の圃場2とも育苗中の下位葉にべと病が発生した。また、収穫期の6月1日、または7日の調査では外葉部に発生が認められ、両圃場とも発生度は無処理区の40程度に対し、殺菌剤散布区が30前後であり、防除価は30程度であった。

ごま症の発生度は、外葉形成期に2回のべと病防除を行うことで圃場1が無処理区の50に対して33、圃場2が無処理区の87に対して40であった。

表 1 キャベツベと病の防除を目的としたメタラキシルMを含む殺菌剤の 散布回数・時期と「初恋」のべと病及びごま症の発生度、防除価

現地圃場 (定植日)	散布回数	散布日		- 調査日	べと病 (外葉部)		_ごま症_
		4月13日	4月27日	<b>则且</b> 口	発生度	防除価	発生度
圃場 1 (3月20日)	1 回	1			28	29	56
	2 囯	1	2	6月1日	28	29	33
	無処理				39	_	50
圃場 2 (3月26日)	1 回	1			33	17	73
	2 囯	1	2	6月7日	27	33	40
	無処理				40		87

- 注1) ①:メタラシキルM・TPN水和剤800倍
  - ②:マンゼブ・メタラシキルM水和剤1000倍
  - 2) 発生度は各区20株の発生程度を多(出荷不能)、中~少(B品)、微、無に分類し、以下の式から算出した。
    - 発生度= (3A+2A+C) /3/調査株数×100 ただし、A:多、B:中~少、C:微の株数
  - 3) 防除価=100- (処理区の発生度/無処理区の発生度) ×100
  - 4) 供試品種「初恋」、地床育苗

## 5 問題点と今後の展開方向

農薬取締法では作物名・病名・農薬が規定されており、農薬の使用回数・倍率・使用 時期が定められている。現状ではキャベツごま症を対象とする登録農薬はない。一方、 キャベツベと病については農薬が登録されているにも関わらず、有効に利用されていな い状況が明らかとなった。

育苗を含めた春播き栽培の生育前半は、病害虫の発生が少ない時期と考えて農薬散布を怠りがちであるが、トンネル被覆される育苗期はべと病に罹病しやすい環境でもある。 まずは、べと病の適期防除がされるよう啓発していく。

(銚子グループ 主任上席普及指導員 吉田 俊郎)